川崎病に対する免疫グロブリン療法
１００mg／kg１回投与及び，１００mg／kg／日連日５日間投与の一年後の成績
（分担研究：川崎病の治療法に関する研究）

原田研介[1)]，大国真彦[1)]，山口英夫[1)]，柳川　洋[2)]，薗部友良[3)]，川崎富作[3)]

要約　川崎病に対して昭和５８年１０月７日から昭和６０年２月１４日の間は完全分子型もしくはペプシン処理型免疫グロブリン１００mg／kg１回投与を行った。また，昭和６０年２月１５日から昭和６１年３月３１日の期間は完全分子型もしくはペプシン処理型免疫グロブリン１００mg／kg／日連日５日間投与を行った。両者ともにアスピリンを併用し，かつ，アスピリン単独治療群と比較した。1年後における冠動脈障害発生率の各群の比較では１００mg１回投与及び，連日５日投与のいずれの方法においても，各治療法間に有意差は認めなかった。入院時に冠動脈障害を認めた例を除いた場合においても各治療群の間に差は認められなかった。

見出し語：川崎病，免疫グロブリン療法

研究目的　川崎病に対する免疫グロブリン療法が冠動脈瘤の発生頻度を低下させることが古庄ら[(1)]に，よって報告された。その報告に基づき，川崎病に対する免疫グロブリンの種類，投与量の検討を行うことを目的とした。

研究方法　昭和５８年１０月７日から昭和６０年２月１４日の間は完全分子型もしくはペプシン処理型免疫グロブリン１００mg／kg１回投与で，アスピリンを併用した。昭和６０年２月１５日から昭和６１年３月３１日までは完全分子型もしくはペプシン処理型免疫グロブリン１００mg／kg／日連日５日間投与で，アスピリンを併用した。コントロールとして，アスピリン単独治療群を設定した。その他の研究実施計画の詳細は過去に報告されたもの[(2)]と同様である。

結果　１００mg／kg１回投与群では計１２４例，１００mg／kg／日連日５日投与群では計２９５例の症例がコントロール群を含めて集められた。

冠動脈障害の発生数，発生率を表１及び表２に示す。

１００mg／kg１回投与での１年後での成績では，アスピリン単独投与群で4.1％（拡大2.7％，瘤1.4％）ペプシン処理免疫グロブリン投与群では8.2％（拡大5.5％，瘤2.7％），完全分子型免疫グロブリン投与群では4.5％（拡大3.0％，瘤1.5％）の冠動脈障害例が認められた。

1）日本大学小児科
3）自治医大公衆衛生
2）日赤医療センター小児科

表 1 100mg/kg 5日間投与による免疫グロブリン療法の冠動脈障害発生数

投与群	症例数	入院時 正常	入院時 拡大	途中経過 正常	途中経過 拡大	途中経過 瘤	途中経過 脱落	30病日 正常	30病日 拡大	30病日 瘤	30病日 脱落	60病日 正常	60病日 拡大	60病日 瘤	60病日 不明	60病日 脱落	1年 正常	1年 拡大	1年 瘤	1年 脱落
アスピリン群	99	88	11	47	32	18	2	65	16	14	4	70	12	8	1	8	81	7	3	8
		(11.1)		(33.2)		(18.6)		(16.8)		(14.7)		(13.2)		(8.8)	(1.0)			(7.7)	(3.3)	
		(11.1)		(51.6)				(31.6)				(22.0)			(1.0)		(11.0)			
ペプシン処理免疫グロブリン群	96	90	6	52	32	10	2	75	8	10	3	82	2	9	0	3	87	2	4	3
		(6.3)		(34.0)		(10.6)		(8.6)		(10.8)		(2.2)		(9.7)				(2.2)	(4.3)	
		(6.3)		(44.6)				(19.4)*				(11.8)					(6.5)			
完全分子型免疫グロブリン群	100	89	11	62	31	5	2	77	14	4	5	83	7	3	0	7	90	3	0	7
		(11.0)		(31.6)		(5.1)**		(14.7)		(4.2)*		(7.5)		(3.2)				(3.2)		
		(11.0)		(36.7)*				(18.9)*				(10.7)*					(3.2)			
計	295	267	28	161	95	33	6	217	38	28	12	235	21	20	1	18	258	12	7	18
		(9.5)		(32.9)		(11.4)		(13.4)		(9.9)		(7.6)		(7.2)	(0.4)			(5.0)	(2.9)	
		(9.5)		(44.3)				(23.3)				(14.8)			(0.4)		(7.9)			

※P<0.05
※※P<0.01

表 2 冠動脈障害発生数

(100mg/kg×1日)

投与群	症例数	入院時 正常	入院時 拡大	途中経過 正常	途中経過 拡大	途中経過 瘤	途中経過 不明	30病日 正常	30病日 拡大	30病日 瘤	30病日 脱落	60病日 正常	60病日 拡大	60病日 瘤	60病日 脱落	6ケ月 正常	6ケ月 拡大	6ケ月 瘤	6ケ月 脱落	1年 正常	1年 拡大	1年 瘤	1年 不明	1年 脱落
アスピリン群	75	68	7	46	22	7	0	59	9	6	1	63	9	2	1	66	7	1	1	70	2	1	1	1
		(9.3)		(29.3)	(9.3)			(12.2)	(8.1)			(12.2)	(2.7)			(9.5)	(1.4)			(2.7)	(1.4)	(1.4)		
				(38.7)				(20.3)				(14.9)				(10.8)				(4.1)				
ペプシン処理免疫グロブリン群	73	65	8	39	26	7	1	56	11	6	0	59	9	5	0	64	7	2	0	67	4	2	0	0
		(11.0)		(35.6)	(9.6)	(1.4)		(15.1)	(8.2)			(12.3)	(6.8)			(9.6)	(2.7)			(5.5)	(2.7)			
				(45.2)				(23.3)				(19.2)				(12.3)				(8.2)				
完全分子型免疫グロブリン群	66	61	5	42	18	4	2	52	10	4	0	56	7	3	0	60	5	1	0	62	2	1	1	0
		(7.6)		(27.3)	(6.1)	(3.0)		(15.2)	(6.1)			(10.6)	(4.5)			(7.6)	(1.5)			(3.0)	(1.5)	(1.5)		
				(33.3)				(21.2)				(15.1)				(9.1)				(4.5)				
計	214	194	20	127	66	18	3	167	30	16	1	178	25	10	1	190	19	4	1	199	8	4	2	1
		(9.3)		(30.8)	(8.4)	(1.4)		(14.1)	(7.5)			(11.7)	(4.7)			(8.9)	(1.9)			(3.8)	(1.9)	(0.9)		
				(39.3)				(21.6)				(16.4)				(10.8)				(5.6)				

S.60.2.14登録まで

１００mg／kg／日連日５日間投与での１年後の成績ではアスピリン単独投与群では１１.０％（拡大7.7％，瘤3.3％），ペプシン処理免疫グロブリン投与群では6.5％（拡大2.2％，瘤4.3％），完全分子型免疫グロブリン投与群では3.2％（拡大3.2％，瘤０％）の冠動脈障害例が認められた。これらはいずれの間にも有意差は認められなかった。

考察　先に報告[2][3]したとうり，１００mg／kg１回投与においては，途中経過，３０病日，６０病日において，冠動脈障害の発生数は何ら有意差を認めなかった。１年後の経過においても差が認められず，これは当然予想された結果である。従って，１００mg／kg１回投与では免疫グロブリン投与の有無，及び，免疫グロブリンの種類にかかわらず，有効性はないものと判断して良いであろう。

１００mg／kg／日連日５日間投与においては，途中経過，３０病日，６０病日において，完全分子型免疫グロブリン投与群において，アスピリン単独治療群と比較して，良好な成績であったことは先の報告書[3]で述べた。１年後の成績においては，有意差を認めないという結果が得られた。つまり長期的な予後に関してはアスピリン単独治療と免疫グロブリン療法との間に差はないと結論できる。しかしながら，統計学的に有意差は認められなかったが，アスピリン単独投与群１１.０％，完全分子型投与群3.2％の冠動脈障害発生率であり，また，完全分子型免疫グロブリン投与群では１年後に瘤を残したものがないということから判断して，臨床的には完全分子型免疫グロブリン投与は100mg／kg／日５日間の投与でも有効であるとの印象がある。

参加施設名及び班員名

北大	長谷直樹
山形大	佐藤哲雄
日赤医療センター	薗部友良
聖マリアンナ大	山田兼雄
東京女子医大第二病院	多田羅勝義
日大	原田研介
愛知医大	尾内善四郎
金沢医大	浅井利夫
明和病院	播磨良一
広島市民病院	岡崎富男
松山赤十字病院	西林洋平
久留米大学	加藤裕久
県立宮崎病院	佐藤雄一

文　献

(1) Frusho K.et al : High-dose intravenous gamma globulin for Kawasaki disease.
Lancet Ⅱ：1054,1984

(2) 大国真彦　他
川崎病γ－グロブリン療法に関する小委員会，厚生省心身障害研究，乳幼児における原因不明疾患に関する研究
第２分冊　川崎病に関する研究
昭和６０年度報告書　P43

(3) 川崎病に対する免疫グロブリン療法
１００mg／kg／日連日５日間投与の成績
厚生省心身障害研究
川崎病に関する研究，昭和６１年度研究報告書
P105

Abstract

Intravenous gamma globulin therapy in Kawasaki disease

The outcome of coronary abnormality
at one year after the initial treatment

Kensuke Harada
Masahiko Okuni
Hideo Yamaguchi
Hiroshi Yanagawa
Tomoyoshi Sonobe
Tomisaku Kawasaki

Intravenous gamma globulin was given to the patients with Kawasaki disease. Firstly 100㎎/㎏ single dose was given and secondly 100㎎/㎏/day for 5 consecutive days were given. Besides gamma globulin, aspirin was also given in both studies. A group who was treated with aspirin alone was set up as a controle group.

At one year after the initial treatment,no statistical difference was recognized among these groups as concerning the prevalence of coronary abnormality.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約 川崎病に対して昭和58年10月7日から昭和60年2月14日の間は完全分子型もしくはペプシン処理型免疫グロプリン100 mg/Kg1回投与を行った。また,昭和60年2月15日から昭和61年3月31日分期間は完全分子型もしくはペプシン処理型免疫グロブリン100 mg/kg/日連日5日間投与を行った。両者ともにアスピリンを併用し,かつ,アスピリン単独治療群と比較した。1年後における冠動脈障害発生率の各群の比較では100 mg 1回投与及び,連日5日投与のいずれの方法においても,各治療法間に有意差は認めなかった。入院時に冠動脈障害を認めた例を除いた場合においても各治療群の間に差は認められなかった。